

千葉市感染症発生動向調査情報

2024年 第15週 (4/8-4/14) の発生は？

1 定点報告対象疾患(五類感染症)

報告のあった定点数	定点	15週	14週	13週	12週	
上段: 患者数 下段: 定点当たりの報告数 「定点当たりの報告数」とは 報告数/報告定点数	小児科	18	18	18	18	*正式名称は インフルエンザ/COVID-19定点
	眼科	5	5	5	5	
	*インフル/COVID	28	28	28	28	
	基幹	1	1	1	1	

定点	感染症名	注意報	千		葉		市		千葉県
			4/8-4/14	4/1-4/7	3/25-3/31	3/18-3/24	4/1-4/7		
			15週	14週	13週	12週	14週		
小児科	RSウイルス感染症		14	15	4	6	75		
	咽頭結膜熱		1	7	3	2	60		
	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	◎	72	55	65	65	515		
	感染性胃腸炎	○	77	70	97	91	471		
	水痘		3	0	3	2	17		
	手足口病		7	2	0	0	7		
	伝染性紅斑		2	1	2	3	1		
	突発性発しん		4	7	3	5	28		
	ヘルパンギーナ		2	0	1	0	3		
	流行性耳下腺炎		2	1	0	1	5		
*インフル/COVID	インフルエンザ (高病原性鳥インフルエンザを除く)	↓↓	63	128	391	554	1,225		
	新型コロナウイルス感染症	→	82	79	112	112	963		
眼科	急性出血性結膜炎		0	0	0	0	0		
	流行性角結膜炎		1	2	1	1	17		
基幹	クラミジア肺炎 (オウム病を除く)		0	0	0	0	0		
	細菌性髄膜炎 (髄膜炎菌性髄膜炎を除く)		0	0	0	0	0		
	マイコプラズマ肺炎		0	0	0	0	2		
	無菌性髄膜炎		0	0	0	0	0		
	感染性胃腸炎 (ロタウイルスに限る)		0	0	0	0	0		

★★: 流行中 ★: やや流行中 ◎: 増加 ○: やや増加 →: 変化なし ↓: やや減少 ↓↓: 減少

「流行中」 流行発生警報開始基準値以上

「やや流行中」 流行発生注意報基準値以上、又は流行発生警報開始基準値を下回った後に流行発生警報終息基準値以上

2 全数報告対象疾患: 7 例

病名	性	年齢層	診断(検査)方法	病名	性	年齢層	診断(検査)方法
結核	男性	20歳代	病原体等の検出等	後天性免疫不全症候群	男性	40歳代	血清抗体の検出
	男性	70歳代			男性	20歳代	
E型肝炎	女性	70歳代	血清IgA抗体の検出	梅毒	男性	60歳代	血清抗体の検出
カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	男性	70歳代	細菌の分離・同定、薬剤耐性の確認及び起因菌の判定		-	-	

・第15週は、結核2例(43)、E型肝炎1例(7)、カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症1例(4)、後天性免疫不全症候群1例(2)、梅毒2例(23)の発生届があった。

※ ()内は2024年の累積件数。但し、累積件数は速報値であり、データが随時訂正されるため変化します。

定点当たり報告数 第15週のコメント

<A群溶血性レンサ球菌咽頭炎>

前週より増加し4.00となり、過去10年の同時期と比べると最多となった。年齢階級別の報告数は4歳が最多。区別では、緑区(8.67)が流行発生警報開始基準値(8.0)を上回り最多で4歳の報告が最も多かった。

<感染性胃腸炎>

前週よりやや増加し4.28となった。過去10年の同時期と比べると少なめで、年齢階級別の報告数は1歳が最多。区別では、若葉区(9.50)からの報告が最多で6-11か月の報告が最も多かった。

<インフルエンザ>

前週より減少し2.25となった。過去10年の同時期と比べるとほぼ平均レベルで、10歳未満の年齢階級別の報告数は7歳が最も多かった。区別では、若葉区(3.50)からの報告が最多で10歳未満では2歳及び7歳の報告が最も多くあった。

<新型コロナウイルス感染症>

前週からほぼ横這いで2.93となった。年齢階級別の報告数は50歳代が最多。区別では、中央区(5.00)からの報告が最多で30歳代の報告が最も多かった。

■ 「過去10年との比較グラフ」及び「区別の発生グラフ」はWebSiteでご覧いただけます。

- ・ 過去10年との比較グラフ

<https://www.city.chiba.jp/hokenfukushi/iryoeisei/khoken/kkagaku/idsc/documents/graph2024.pdf>

- ・ 区別の発生グラフ

https://www.city.chiba.jp/hokenfukushi/iryoeisei/khoken/kkagaku/idsc/documents/graph_ward2024.pdf

■ トピック ■

<梅毒>

2024年第14週時点の全国の届出累積数は3,332例で、過去10年の同時期と比べると2023年(3,785例)に次いで2番目に多くなっています。都道府県別では東京都(816例)が最も多く、次いで大阪府(416例)、福岡県(200例)の順となっています。千葉県は115例で全国で7番目の多さとなっています。

千葉市では第15週に2例の届出があり、2024年の届出累積数は23例となりました。過去10年の同時期と比べると、2023年(24例)に次いで2番目の多さとなっています(図1)。男性19例(82.6%)、女性4例(17.4%)で、男性では20歳代(6例、31.6%)が最も多く、次いで30歳代及び40歳代(4例、21.1%)の順となっており、女性では10歳代で2例の届出がありました。また、1例の妊娠事例がありました。

2014年から2024年までに、男性228例(65.1%)、女性139例(37.9%)の合計367例の届出がありました。2016年(29例)に2015年(13例)より増加した後、2020年(24例)まで30例前後で横ばいとなっていました。2021年(48例)以降急増し、2023年(71例)は過去10年で最多となりました。2021年から2023年まで、女性はほぼ横ばい(2021年23例、2023年25例)でしたが、男性(2021年25例、2023年46例)は1.8倍となりました(図1)。

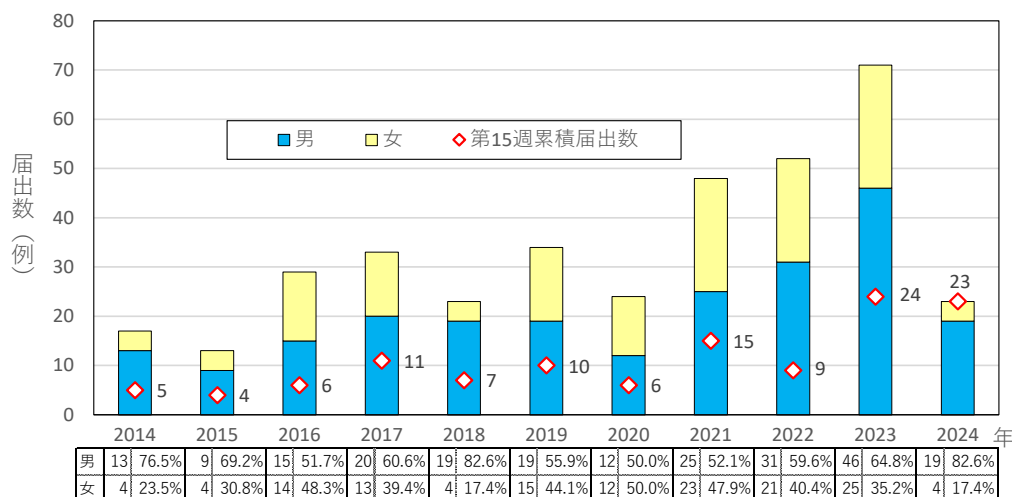


図1 年別・性別 (2014年第1週-2024年第15週 n=367)

性別の年代別届出数は、男性では20歳代から50歳代まで(189例、82.9%)で8割以上を占めており、40歳代(66例、28.9%)が最も多く、女性では10歳代から30歳代まで(108例、77.7%)で8割近くを占めており、20歳代(67例、48.2%)が最も多くなっています(図2)。

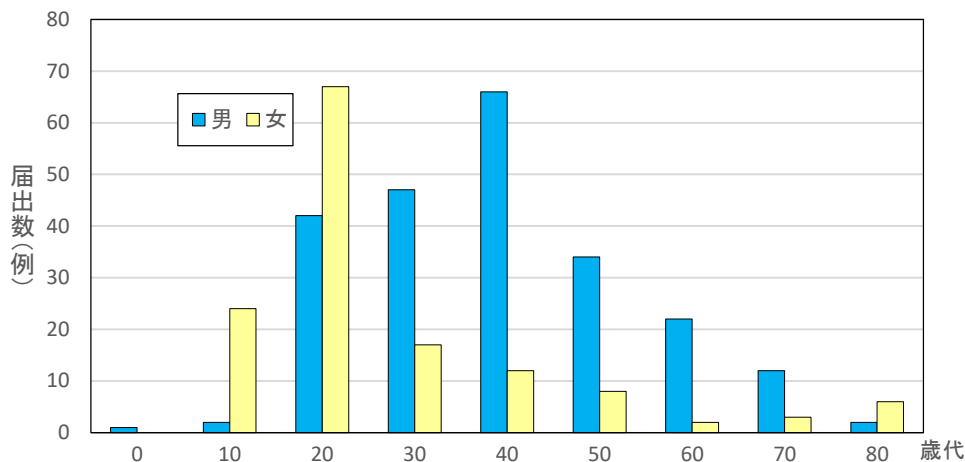


図2 年別・性別 (2014年第1週-2024年第15週 n=367)

病型別では、男性は早期顕症梅毒Ⅰ期(以下「Ⅰ期」という)が86例(37.7%)、早期顕症梅毒Ⅱ期(以下「Ⅱ期」という)が63例(27.6%)、先天梅毒が1例(0.5%)、晩期顕症梅毒(以下「晩期」という)が16例(7.0%)、無症候が62例(27.2%)であり、Ⅰ期が多く、女性はⅠ期が16例(11.5%)、Ⅱ期が59例(42.4%)、晩期が3例(2.2%)、無症候が61例(43.9%)であり、Ⅱ期と無症候が8割以上を占めています。届出数が増加した2021年以降、男性では届出数におけるⅠ期の占める割合が増加しています(図3、図4)。

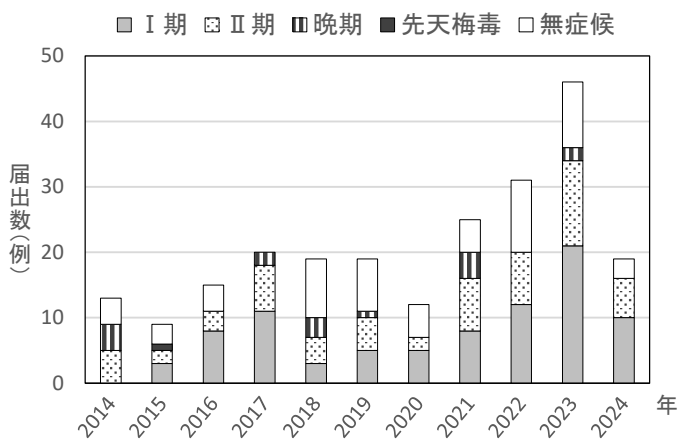


図3 年別・病型別

(男性: 2014年第1週-2024年第15週 n=228)

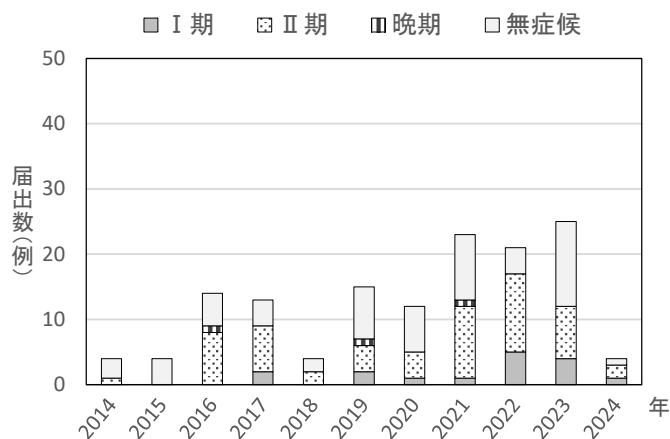


図4 年別・病型別

(女性: 2014年第1週-2024年第15週 n=139)

梅毒とは、梅毒トレポネーマという病原体により引き起こされる感染症です。

患者数が多いこと、比較的安価な診断法があること、妊婦への適切な抗菌薬治療により母子感染のリスクが低下することから、公衆衛生上重点的に対策をすべき疾患に位置付けられています。

主な症状は、性器や口の中に小豆から指先くらいのしこりや痛みの少ないただれができる(Ⅰ期)、痛み、かゆみのない発疹が手のひら、足の裏、体中に広がる(Ⅱ期)等がありますが、これらの症状が消えても感染力が残っているのが特徴です。治療をしないまま放置していると、数年から数十年の間に心臓や血管、脳などの複数の臓器に病変が生じ、時には死にいたることもあります。なお、Ⅰ期及びⅡ期は、最も感染性が高い時期となっています。

主に性的接触により、口や性器などの粘膜や皮膚から感染します。オーラルセックス(口腔性交)やアナルセックス(肛門性交)などでも感染します。また、一度治っても再び感染することがあります。

妊娠中の梅毒感染は特に危険です。妊娠している人が梅毒に感染すると、母親だけでなく胎盤を通じて胎児にも感染し、死産や早産になったり、生まれてくる子どもの神経や骨などに異常をきたすことがあります(先天梅毒)。生まれたときに症状がなくても、遅れて症状が出ることもあります。

国立感染症研究所によると、全国の動向は、2011年頃から異性間性的接触を感染経路とする男女の症例数が増加傾向にあり、特に2021年以降は、より顕著に増加しています。2021年以降女性症例数が大幅に増加していた中で、2023年には妊娠症例数だけでなく割合も増加し、数および割合がともに過去2年間を上回りました。更に、先天梅毒は2019年から2022年には年間20例前後報告されていましたが、2023年には37例に急増し、1999年の感染症法施行以降最も多い症例数となりました。

予防として、粘膜や皮膚が梅毒の病変と直接接触しないように、また病変の存在に気づかない場合もあることから、性交渉の際はコンドームを適切に使用しましょう。ただし、コンドームが覆わない部分から感染する可能性もあるため、コンドームで100%予防できると過信はしないようにしましょう。また、不特定多数の人との性的接触は感染リスクを高めることから避けることが望ましいです。もし皮膚や粘膜に異常を認めた場合は、性的な接触を控え、早めに医療機関を受診して相談しましょう。

千葉市では、梅毒の他、HIV抗体やクラミジア抗体検査について、令和5年度から市内医療機関に委託し実施していますので、心当たりのある方はパートナーの方も含め受診をご検討ください。
詳細は、下記URLをご参照ください。

<https://www.city.chiba.jp/hokenfukushi/iryoeisei/hokenjo/kansensho/eizu.html>